広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	鏡の間
Author(s)	児童の言語生態研究会,
Citation	児童の言語生態研究 , 4 : 67 - 69
Issue Date	1970-12-15
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045051
Right	
Relation	

鏡の間

毎号、児童の注目すべき文章を掲載して来たが、本号は〃書くということ〃の特集ということで、それと関連ある資料であろうと心がけた。

編集部の依頼により、東京都港区立港南小学校六年二組（二十三名）、横浜市立芹ガ谷小学校六年四組（三十九名）に次のような作文を書いてもらった。

『うれしさ、たのしみ、どちらかの題で作文しなさい。』

二・三日後、再び、

『くやしさ、かなしみ、どちらかの題で作文しなさい。』

その結果の特徴を示すと

題目選択一覧

	港南小 男	港南小 女	芹ガ谷小 男	芹ガ谷小 女	計 男	計 女	計
① うれしさ	6	9	9	6	15	15	30
① たのしみ	12	9	2	7	14	16	30
② くやしさ	6	12	18	10	24	22	46
② かなしみ	5	1	0	8	5	9	14

選択関連傾向一覧

	港南小 男	港南小 女	芹ガ谷小 男	芹ガ谷小 女	計 男	計 女	計
① うれしさ → ② くやしさ	4	5	2	7	6	12	18
① うれしさ → ② かなしみ	5	1	6	3	11	4	15
① たのしみ → ② くやしさ	2	7	12	7	14	14	28
① たのしみ → ② かなしみ	0	0	0	2	0	2	2

作文例

註　発想・素材のとり方が動かないことを注意したい。

①たのしみ→②くやしさ

先生のたのしみ

六年　ＨＡ男

先生のたのしみは、国語の作文の時間だ。いつも、ひねくれた問題をだして、みんなをこまらせている。

「やさしい心をテーマに物語を書きなさい。」

とか、「うれしいをテーマに作文を書きなさい。うれしいということばをつかうな。」

と、いうことをいってみんなをこまらせている。六年でかいた作文は、ぼくが、今までに書かされた物と全ぜんちがう。こんな、ひねくれた問題をだすのも、先生の一つのたのしみなのかもしれない。

ぼくのくやしさ

六年　ＨＡ男

「あーあ、また、作文の時間だ。」

時間がこくこくとすぎる。一人また一人とできていく人たちが先生に見せにいく。

「うーん。」

まだ、ぼくは、材料がみつからない。どんどんできる人は、かいている。

「ちきしょう。」

もう、ぼくのむねの中は、書けないくやしさで、いっぱいだ。

「うーん。」

まだ材料がみつからない。

「そうだ、これにしよう。」

と、思った時は、もう時間がない。

「あー、あともうすこしだったのに。」

さっきのかけないくやしさではない、作文用紙にかきたい気もちでいっぱいだ。

「もうすこし時間があればなあー。」

と、紙にかけないくやしさがでてくる。（芹ガ谷小）

たのしみ

ＩＹ女

心の中で、だれかが、おどっている、うれしそうに、足が、中に、ういている。

はねが、はえて、今にも、とぶように、心の中に、あかりがついた、明るい、目がくらみそう、ダイヤモンドの、光りかもしれない。

どこかに、心が、飛んでいく、いいことがまっているところに。

心が、明るいとても、明るい、わたしも、おどりそう、歌いそう。心の中は、うれしさで、いっぱい、今にもやぶれそう、でもこのうれしさは、ほんの一しゅん、それほど、自分が、思っていたことなのに、実際は、全々ちがう。

くやしさ

ＩＹ女

心が、とても、あつい、ガソリンを、かけて、燃しているみたいだ。

心が、燃えている、思わず、水をまく、心の中の、火事は、いつまで、たっても、やまない。

手が、思わず、力を、入れて、ふるえる、にくしみが、上のほうへと、いく。

火は、水に、よって、ますます、大きくなり、ほのおが、上へ、上へといく。

口から、いかりの、ことばがでる。心の中を、火事にした人に、おかえしを、してやりたい。

そんな、気もちが、どこからか、おこってくる。

ほのおが、だれかに、よって、けされていく、下へ下へと下がって、いくが、にくしみは、きえない。

（港南小）

ドイリー

六年　ｋＹ女

一針かけて、引きぬいて、一針かけて、引きぬいて……。

毎日、ひまな時に少しずつレース編みをする。円形のドイリーが、ちょっぴり、ちょっぴり、大きくなっていく。初めは、小さな、小さな輪にすぎなかったけど、今はもう、直径二十三センチぐらい……。

くさり編み、長編み、引っかけて、ぬいて、引っかけてぬいて……。あと何日で仕上がるかしら。

でき上がったら、花びんの下に、しこうかな。

はやくできないかしら。

とても、楽しみ。

ピアノとテレビ

六年　ｋＹ女

時計は、六時を少し過ぎていました。あたりは、もううす暗くなっています。私はテレビのスイッチを入れ、その前にチンと腰をおろしました。おもしろい、とてもおもしろい……。五分位たったでしょうか。キンコーン、だれでしょう。言うまでもなく、ピアノの先生。人の気も知らないで、どうしてこんな時間に来るの？　私は、思わず先生を、にらみました。そんな事とも知らず、先生は、練習を開始しようとします。私は練習どころじゃありません。テレビが、気になって……。失敗はかり。先生が注意しても　全然聞こえないのです。何分位たったでしょうか。やっと練習が終わりました。すぐテレビにかけつけたけれど、すでに終ってから、五分過ぎていました。画面では、ニュースのアナウンサーが、一生懸命しゃべっています。私はアナウンサーまでが、にくらしく見えてきました。テレビをけっとばしたくなっちゃった。　（芹が谷小）

①うれしさ→②くやしさ

プレゼント

ＭＨ男

あかちゃんが、生まれたので、その、おいわいに、行きました。とちゅうで、おいわいのふくをかいました。ぼくは、いやいやながらついていきました。やっと、かって、行こうとしたら、おとうさんが、「もうすぐおまえのたんじょう日だから、すきなものを、えらんできなさい。」と、いいました。ぼくは、おもちゃうりばへ、すっとんでいき、さがしたあげく「光線じゅうが、いい、これで、いいでしょ。」と、たのんだら、おとうさんが「ちょっとこっちへこい。」と、いいました。ぼくは、光線じゅうに、きめていたのでちょっとだけ見るつもりで、いきました。そこには、ちいさい子がのる、おもちゃの自動車が、あったのでなあんだといおうとしましたが、おとうさんのゆびさしているものが、自転車、だったので、光線じゅうなんてわすれて、「これが、いい。」と、思わずいってしまいました。

将棋

ＭＨ男

日曜日の朝、おとうさんが、起きるころ、ぼくは、いそいで洋服にきがえて、下におりて行きました。今日は、将棋が、やれるからです。将棋を、ならべて、おとうさんの、起きて来るのを、待ちました。なかなか、起きてこないので、二階へ、行って、本を、読んでいました。

すこしすると、「おうい、いっきょくやらないか。」という、おとうさんの、声がしたので、うれしくて、すぐに行き、さっそく始めました。一回目おとうさんが、勝ちました。二回目また、負けてしまいました。三回目ぎりぎりのところで、ぼくが、勝ちました。けれども、四回、五回、六回、七回と、続けて、負けてしまいました。ぼくは、ちくしょうと思って「もう一回だけやって。」と、たのみました。おとうさんは笑いながら、一回やってくれましたが、負けてしまった。

（芹が谷小）

うれしさ

六の二　ＫＫ男

心の中に小さくなってぽつんとあり、また、大きく

もそんざいしている。いつもは、小さくちりのようにうごめいている。だがいざ（えさ）をあたえるとむくむくふくれだして、心の中のものをみんなおおいかぶさってしまいになにもかもをわすれさせてうちょう点にさせてしまう。そしていろいろな、さいなんをおこすこともしばしばある。このわたがしのようなものはよくぼうとふんわかムードのかたまりにすぎなく、その力は、いじ悪るな、い大なものといえよう。

くやしさ

六の二　KK男

心の中にもじもじイライラとよつきるふまんそうにいる。一本のゴム糸につながれている。そしていつも外にでようとあばれまわっている。そして門の所までは、きてゴム糸にひっぱられてしまい、イライラしている。それなのにいざおこらしたらさーたいへん、ドカーンと一発きたと思ったらゴム糸だろとかなんだろうがぶっこわして外に出て大あばれ。そのあばれかたは、ものごとの見さかえなしにぶつかったりそして気がしずまるとおとなしく心の中にはいっていってしまう。するとまたゴム糸につながれてしまうとまたイライラはじめるこのいったんおこるとどうしようもないばくだんみたいな物は、ひじょうにきけんな力をたくわえている。

（港南小）

運動会での事

六年四組　JA女

わたしの待ちに待った日が、今年も来ようとしている。去年、わたしは、この日を不安も入っている気持ちで、待った。その不安は、適中した。徒競争で、びりだった。でも、運動会は、勝つことだけではない。と自分に言いきかせた。そして、じきゅう争だ。今度こそは、と思ったが、だいじょうぶかな？心配でたまらない。でも、もうおそい。ピストルの音が、鳴っていた。走った、自分の力をふりしぼって、走った。よし、今度こそはと思った。その時、心配などはなかった。そして六周目、テープが見える。すると、後で人がいる。ぬかせるまえと思ったが、ぬかされ二位だった。でも、このときのうれしさは、今もわすれられない。二位でも、自分の力を出し最後まで走ったことがとってもうれしかった。

（芹ガ谷小）

わたしの最大のなやみ

六年四組　JA女

今年、六年になって、朝礼の時一番前になった。わたしは、はずかしいやらかなしいやらで、心の中は、ごちゃごちゃだった。

母からは、「一番前なの。そんなチビだったの。」など言われ、とってもしゃくだった。そして、きかい体操部へ入ったのは、好きというので入ったが、もう一つ、せがのびるんじゃないかという希望もあった。

機械体操部へ、入った。だんだんせがのびたような気がした。そして希望がわいてきた。すると、運動会で、クラブの発表するということで、やることになった。五人ずつ組になった。そうしたら、わたしは、小さいから五年といっしょになってしまった。その時、一人の六年の女の子が、

「英子ちゃんチビだからね。」と言った。その時、とってもくやしく、なみだがあふれそうになった。でも父の話を聞くと、父も、六年の時、小さかったそうだ。するとわたしも父に似て、中学になってからのびそうだ。でも、

「チビ、チビ、チビ、チビ。」と心の中から聞こえてくるような気がする。でも「チビ」と言われると、とてもくやしくなって、

「わたしだってあなたより、大きくなりますよーだ」と大きな声で、言いたくなる。

①うれしさ→②かなしみ

YA女

わあい。やったぞ。とうとうやったぞ。勝ったんだ。いつも算数で私より良い点を取ってるやつ。算数ではだめだったけれども、国語で勝ってやったんだ。わあい。わあい。手をたたきたくなってくる。

とうとうやったんだ。やつの鼻の頭をへしおってやることが。算数の時は、いつもえばっているいやなやつ。国語だけじゃない。理科だって社会だってちょっびりの差なんだけど勝ってやったんだ。ヤッホー。

とびあがっちゃった。

（芹ガ谷小）

YA女

ぽっかり穴があいてしまった心。

あの人がいなくなっちゃったなんて信じられない。

この世の人じゃないなんて信じられない。

ついこのあいだまで、あんなに元気だったのに。

手をつないで笑いあったのに。

今でも、その笑い声が、ときどき頭の中でこだまする。

あの人と遊んだときのことが次々とうかんでくる。

でももうあの人の笑い声は聞けない。

いっしょに遊ぶこともできなくなってしまった。

ぽっかりあいた心の穴。

だれにも、うめられない穴。

あの人がいなくなったから。